

# 神まつりと古墳の祭祀

—古墳出土の石製模造品を中心として—

白石 太一郎

---

はじめに	3 古墳における石製模造品のあり方
1 古墳の石製模造品の変遷	4 農工具の石製模造品化の意味
2 古墳の模造品と祭祀遺跡の模造品	5 神まつりと古墳の祭祀

---

## はじめに

沖ノ島17号遺跡をはじめとする福岡県沖ノ島の諸遺跡や奈良県石上神宮禁足地など古墳時代の前半期にさかのぼる可能性の強い祭祀遺跡に、鏡、鉄製武器、碧玉製腕輪形宝器など前半期古墳の副葬品と共通する宝器類が供献されていることはよく知られている。こうした事実から古墳時代、とりわけその前半期は、「死者を祭ることと神を祭ることが完全に分離し得ない状態——祖先霊と神霊に共通する性格を認めた葬・祭未分化の祭祀段階であった」<sup>(1)</sup>とする理解が一般に行われている。古代史の立場から古代沖ノ島の祭祀を検討された井上光貞氏もこうした理解を前提として「葬祭未分化の状態では、人の靈魂 (spirits) であると神 (deities) であることを問わず、同じやり方でそれを礼拝し、崇敬していた。これに反し、葬祭分化の状態になると、靈魂と神との区別が意識され、それぞれの領域で宗教儀礼がおこってくる。すなわち葬儀と祭儀とが成立する」とみ、横穴式石室をもった後期古墳の出現をもって葬儀の成立と考えられた<sup>(2)</sup>。一方、古墳時代における祭祀の問題を考古学の立場から総括された小出義治氏も、古墳と祭祀遺跡の双方から出土する滑石製模造品のあり方から、やはり古墳時代の中葉における喪葬祭祀と神まつりの分離を主張しておられる。すなわち古墳から出土する滑石製模造品は、勾玉・白玉のほかは農工具にほぼかぎられるのに対し、祭祀遺跡からは逆に農工具の出土することはごくまれで、古墳にもみられる勾玉・白玉のほかには剣と有孔円板が加わって主要セットを構成する。このことから、これらの石製模造品の盛行する古墳時代前Ⅲ～Ⅳ期（古墳時代中期—白石注）には喪葬祭祀と神まつりとが明らかに分離したとされるのである<sup>(3)</sup>。また槇山林継氏も同様

## 1 古墳の石製模造品の変遷

の視角から、古墳とそれ以外の祭祀遺跡における石製模造品のあり方を比較し、祭と葬の分化を指摘しておられる<sup>(4)</sup>。

このように、多少ニュアンスの相違はあるものの、多くの研究者は前期の古墳における祭祀は基本的に神祭り共通のものであり、中期ないし後期以降それが分化して行くものと考えているのである。しかし、はたして古墳時代の前半期の古墳における祭祀を葬祭未分化と規定することができるものであろうか。古墳が出現するのは、この日本列島に農耕文化が根をおろして数百年の後のことであり、その間、弥生時代数百年の間にも、神まつり、葬送儀礼ともにそれぞれ大きな変化をとげているのである。かりに前半期古墳における祭祀が後半期古墳のそれに比べて、より神まつりに近い要素を含むとしても、やはりそれは死せる首長の葬送儀礼であり、単なる神まつりとは明確に区別されるべきものであったのではなかろうか。かつては筆者自身も、前期古墳の副葬品と4世紀代の祭祀遺跡から発見される遺物との共通性などから、前期古墳の被葬者が神を祭る司祭者、あるいはむしろ神そのものに近い存在と考えられていたのではないかと考えたことがある<sup>(5)</sup>。確かに神をまつる者が神そのものに転化しうることは、太陽神の巫女としてのヒルメからアマテラスへの変化<sup>(6)</sup>や、南島におけるをなり神信仰<sup>(7)</sup>などからも明らかである。しかし古墳時代のひとびとが古墳の被葬者を即神と考えていたかどうかは、単に副葬品と祭祀遺跡の供献遺物との一致のみから論証しうるほど簡単な問題ではなさそうである。

本小論は、こうした問題に対する一つのアプローチとして、古墳と祭祀遺跡の双方にみられるいわゆる石製模造品を手がかりとして、古墳の祭祀と神まつりの同異を考古学の立場から資料に即して具体的に考えてみようとするものである。さきにふれた小出義治氏や椙山林継氏をはじめ、何人かの先学がすでに同様の視点からこの問題を検討しておられる。しかし、それらの方法と結論にはただちに同意しがたいところも少なくない。特に方法的に石製模造品の組成の時期的変化を捨象した分析結果には同意しがたく、また神まつりと古墳の祭祀の本質的な相違がどこにあるかについても必ずしも明確にされてはいないように思われる。屋上屋を架するような小論を試みる所以である。

## 1 古墳の石製模造品の変遷

古墳から出土する石製模造品には、碧玉製のものと滑石製のものがあり、また模造される器物の種類もきわめて多岐にわたっている。ただ、小論では古墳と祭祀遺跡に

共通する遺物としての石製模造品をとりあげようとするのであって、いわゆる石製品・石製模造品論を展開しようとするものではない。したがってここでは、主として碧玉でつくられた腕輪形宝器や琴柱形石製品、筒形石製品、石製合子など一般に石製品とよばれるものはもとより、模造品でも前期の古墳にのみしかみられない石製鏃などの碧玉製の模造品は一応除外し、滑石製の模造品に考察の対象を限定することにした。古墳から出土する滑石製模造品は、その模造の対象となった器物によって分類すると、武器・武具（剣・甲・盾など）、農工具（斧・のみ・鎌・鋤・刀子など）、服飾品（鏡・有孔円板・勾玉・白玉・下駄など）、機織具（紡錘車・梭・篋・膝・腰掛など）、酒造具（罎・甗・盤・槽・案・臼・杵）などに分けられる。ただそれらのうちでごく一般的にみられるものは、斧、鎌、刀子などの農工具と勾玉、白玉、それにおそらく鏡を模したと思われる有孔円板などごくかぎられた品目となる。

古墳からの石製模造品の出土例のうち、管見にふれたもので主要なものを表にまとめたものが次頁以下の付表である。これは、古墳から出土する滑石製模造品の組合せ関係を考える上に参考となる例をまとめたもので、ガラス小玉などと同じように、単なる装身具としての性格をももっていたと思われる白玉だけの出土例や、単一品目で単体のみの出土例などは原則としてはおいて。いまこの表で種類ごとの出土頻度をみると確かに刀子の出土例が119例中68例と多く、ついで斧が46例、鎌が39例というように農工具がその組合せの中に占める位置が大きいことは明白である。ただ古墳からの出土例が少ないといわれる剣や有孔円板もそれぞれ剣が25例、有孔円板が33例もあって、時期的な変化や地域差をも考慮しなければ、簡単に祭祀遺跡の場合と組合せの原理を異にするものとは結論できないようである。したがってここではまず、古墳出土の滑石製模造品の組合せの時期的変化を検討することにした。

古墳出土の石製模造品の組合せの時期的変化を、早くから明確に指摘しておられるのは小林行雄氏である。氏は石製模造品が当初は碧玉製品として出現し、漸次滑石製品に移行したこと、また古くは一品一、二点ずつの副葬であったのが、のちに滑石製で小型粗製の同種品を多数副葬するようになることを明らかにし、特に滑石製勾玉を中心に同種多量の石製模造品を副葬する風習が5世紀初頭から中葉にかけての現象であることを明らかにされたのである<sup>(8)</sup>。また千葉県石神2号墳出土の石製模造品を検討された小野山節氏も、石製模造品の組合せや石製刀子の型式変化などから、関東地方における石製模造品をもつ古墳を5時期に細分しておられる<sup>(9)</sup>。

いま、これらの先学の研究成果を基礎に、あらためて古墳から出土する滑石製模造品のあり方を検討すると、大きく4期に分けて理解することが適当と思われる。

付表 主要な石製模造品出土古墳と出土の石製模造品

(時期及び出土位置の区分については本文参照)

番号	所在地	古墳名	時期	出土位置	武器				鏡・玉類				その他の石製模造品	文献
					剣	刀子	斧	鎌	鏡	有孔円板	勾玉	白玉		
1	佐賀県唐津市佐志	惣原南1号墳									2	41		註 69
2	福岡県福岡市老司	老司古墳1号石室	第2期								24+α			註 53
3	" " "	" 4号石室	第2期								42			註 53
4	" " 和白	飛山1号墳	第4期	b類					4			950		註 33
5	" 飯塚市三緒	栗崎山2号墳									○	○		註 70
6	" 田川市伊田	セスドノ古墳							1			256		註 71
7	" 宗像郡津屋崎町奴山	奴山5号墳	第3期	b類					7			○		註 72
8	" 粕屋郡古賀町筵内	佐谷古墳							2			○		註 73
9	" 浮羽郡吉井町宮田	塚堂古墳	第3期	b類					1			720		註 51
10	" 行橋市稗田	検地所在箱式石棺			1				2			160以上		註 54
11	" " 竹並	竹並A4号横穴	第4期	b類	1							6		註 34
12	" 京都郡苅田町	苅田町所在箱式石棺										2	77	註 54
13	愛媛県松山市畑寺町	三島神社古墳	第4期						2			239		註 74
14	香川県大川郡津田町羽立	岩崎山1号墳A棺				2							不明品(刀?)1	註 75
15	" " "	" B棺				1		1					不明品(利器?)1	註 75
16	山口県山口市朝田	朝田2号円形周溝墓							1			294		註 76
17	" " "	朝田15号墳	第2期								1			註 76
18	広島県深安郡神辺町	国成古墳							○			○		註 77
19	" 双三郡吉舎町三玉	大塚山古墳							2	1		357		註 78

20	広島県福山市加茂町 上加茂	吹越3号墳	第2期	a類						2	144		註 79
21	岡山県総社市阿曾	随庵古墳	第3期	a類					6	1	104		註 45
22	"	石城2号墳							8				註 4
23	" 岡山市澤田	金蔵山古墳	第2期	c類	1	81+α		1					註 16
24	島根県簸川郡田伎村 口田儀	経塚山古墳		a類?						6		棗玉48	註 80
25	" 松江市西川津町	金崎4号墳									○	子持勾玉 2	註 81
26	" " "	薬師山古墳	第3期						6				註 82
27	鳥取県倉吉市	屋喜山6号墳		a類?						○			註 83
28	兵庫県相生市壺根	壺根8号石棺								1	41	棗玉27	註 84
29	" 豊岡市三宅	カチャ古墳	第2期	b類						9	8		註 85
30	大阪府藤井寺市津堂	津堂城山古墳	第2期	b類	1	2				3	○		註 48
31	" " 野中	野中古墳	第3期			81	1	2		1		白, 杵	註 86
32	" 羽曳野市誉田	墓山古墳	第3期	c類						○			註 57
33	" 堺市旭ヶ丘中 町	七観古墳	第3期	c類						2			註 58
34	" " 百舌鳥赤 畑町	カトンボ山古墳	第3期		1	360	6	13		725	約20,000	子持勾玉 4	註 25
35	" 和泉市上代	黄金塚古墳中央柳	第1期	a類						17	○	棗玉多数	註 59
36	奈良県奈良市法華寺 町	大和4号墳	第3期						11	1			註 88
37	" " "	大和5号墳	第3期						1				註 88
38	" " "	大和6号墳	第3期				1	6					註 88
39	" " 山陵町	佐紀陵山古墳	第1期			3	1						註115
40	" " 大和田町	富雄丸山古墳	第1期			6	9					鉦1, のみ1	註 11
41	" 橿原市川西町	新沢48号墳北櫛		a類					2	14	307		註 89
42	" " "	新沢109号墳	第3期	a類					1		約10		註 89
43	" 高市郡高取町 市尾	今田2号墳	第3期	b類		25							註 90

神まつりと古墳の祭祀

番号	所在地	古墳名	時期	出土位置	武器	農工具			鏡・玉類				その他の石製模造品	文献		
					剣	刀子	斧	鎌	鏡	有孔円板	勾玉	白玉				
44	奈良県北葛城郡広陵町大塚	新山古墳	第1期					1							註14	
45	" " " 三吉	巢山古墳	第2期			11		1				35			註17	
46	" " 河合町佐味田	佐味田宝塚古墳	第1期		2	34		1	2		1	10	1	のみ1	註14	
47	" " " "	乙女山古墳	第3期				1		1			6	1	紡錘車7	註91	
48	" " 当麻町兵家	兵家5号墳	第3期	a類								2	171		註92	
49	" " " "	兵家6号墳東石室	第3期									2	1682		註92	
50	" " " "	" 西柳	第3期	a類		10									註92	
51	" 御所市室	室宮山古墳	第2期	c類		15		1				623			註18	
52	京都府京都市左京区大原野石見上里	鏡山古墳	第2期			5		4		1		134		下駄3	註93	
53	" 城陽市平川	久津川車塚古墳	第2期	a・c類		40以上						5,000以上	○	槽1	註26	
54	滋賀県栗太郡栗東町安養寺	新開1号墳北棺	第3期	b類							1		116		註116	
55	三重県上野市才良	石山古墳中央柳	第1期	a類		53	39	1							註10	
56	" " " "	" 東柳	第1期	a類		124	14	3				約6,600		鏡1, のみ2	註10	
57	" " " "	" 西柳	第1期	a類		55	17	3						のみ1	註10	
58	岐阜県大垣市赤坂町	遊塚古墳前方部	第2期			135	8	4						鏡1, のみ1	註94	
59	" 稲葉郡常磐村上土居	上土居古墳				2							109	埴1	註35	
60	静岡県掛川市各和	金塚古墳				○		○								註117
61	東京都世田谷区玉川野毛町	野毛大塚古墳	第2期			233		1	1					案2, 槽1, 盤2, 甗2, 杯1, 下駄1	註23	

62	千葉県千葉市東寺山町	石神2号墳	第2期	a類		20		4			1	1,854		註 20
63	" " 生実町	七廻塚古墳			1	17	4	2				773		註 21
64	" " 南生実町	上赤塚1号墳	第2期	a類			4	2						註 95
65	" 市原市姉崎町	二子塚古墳後円部	第3期			5				2	1	3		註 96
66	" 木更津市	長州塚古墳	第3期			3	1	1	1					註 97
67	" 君津市南子安	馬門古墳									1	77		註 98
68	" 匝瑳郡光町小川台	小川台1号墳南棺		a類						10		32		註 99
69	" 佐原市鶴崎	天神台古墳1号櫛				3	2							註 20
70	" " "	" 2号櫛				2	3	1				○		註 20
71	" 香取郡小見川町一ノ分目	一ノ分目古墳				○	○							註 35
72	" " 神崎町小松	能照寺裏古墳			○	○		○	○					註 35
73	" " 多古町多古台	多古台古墳	第3期	a類	5	9	5	6		17 +α		1,153	円板2	註 30
74	" 松戸市河原塚	河原塚古墳		c類		3								註100
75	埼玉県本庄市北堀	公卿塚古墳	第2期			9	3	4				3		註101
76	" 児玉郡美里村関長坂	聖天塚古墳1号棺		a類						○				註102
77	" " "	" 2号棺		a類							○	○		註102
78	" " "	" 5号棺		a類							30	250		註102
79	群馬県前橋市朝倉町	鶴巻塚古墳				○	○	○	○				下駄	註 27
80	" " 上細井町	南新田稲荷山古墳	第2期			7							膝1, 箆1, 梭1, 腰掛1, 案1, 埴1, 釧1のみ1, 鏃1	註 24
81	" " 総社町		第3期		2	13	5	1						註 24
82	" 高崎市剣崎町長瀬西	おそね塚古墳	第3期			35	4	3	1		7			註 29
83	" " 下小路	剣崎天神山古墳	第2期			71	1	1	2				埴1, 槽1, 杵1	註 19

番号	所在地	古墳名	時期	出土位置	武器				農工具				鏡・玉類				その他の石製模造品	文献
					剣	刀子	斧	鎌	鏡	有孔円板	勾玉	白玉	鏡	有孔円板	勾玉	白玉		
84	群馬県高崎市若田町大塚	若田稻荷塚古墳				○	○										註27, 35	
85	" " 下佐野町長者屋敷	天王山古墳					2	1						○	のみ1		註24, 35	
86	" " 綿貫町金堀	金堀古墳	第4期			2	2				1						註24, 35	
87	" " 岩鼻町	二子山古墳	第3期				11				1						註24, 35	
88	" " 乗附町	五百山古墳					○				○			○			註 35	
89	" " 八幡原	弦巻古墳					○	○			○						註118	
90	" 藤岡市神田					1		2				7		○			註 24	
91	" " "					1	1	2									註 24	
92	" " "							1							鏡1, のみ2		註 24	
93	" " 下戸塚	下戸塚稻荷山古墳					3					1		○			註 19	
94	" " 白石	白石稻荷山古墳東槨	第3期	a類	18	116以上			1						案1, 埴2, 杵1, 箕1		註 27	
95	" " "	" 西槨	第3期	a類	17	133以上						116		○	釧1, 盤1, 杵1, 埴2, 下駄2		註 27	
96	" " "	" 陪塚	第3期			7	1										註 27	
97	" 甘楽郡甘楽町白倉	鬼塚古墳	第3期			8	3			3				58			註 24	
98	" 安中市築瀬	築瀬二子塚古墳	第4期	b類	2	3	2	1	1	22			約1,500		甲2, 盾3		註 31	
99	" " 上間仁田	経塚古墳	第3期		1	約60									槽1		註119	
100	" 伊勢崎市安堀町	お富士山古墳			○	○											註103	
101	" 佐波郡玉村町角淵					○	○	○									註 27	
102	" " 赤堀村五目牛	藤手塚古墳A槨										4	2,126				註104	

103	群馬県佐波郡赤堀村 今井	赤堀茶臼山古墳南 櫛	第3期	a類		21					1	25		註28
104	" 太田市烏山	鶴山古墳	第3期			26	2	3						註105
105	栃木県足利市勸農	車塚古墳	第3期			4		3						註118
106	" 宇都宮市江曾 島町	雷電山古墳	第3期		3		2	1		2	2		短甲2, 盾3	註106
107	" " 台新 田町	新田古墳			3					4				註107
108	茨城県新治郡八郷村 柿岡	丸山4号墳	第4期	b類	7					36	3			註32
109	" 稲敷郡桜川村	兜塚古墳				1								註107
110	" " 美浦村 大塚	大塚古墳	第3期			3	1	2	1					註108
111	" 東茨城郡磯浜 町日下	鏡塚古墳	第1期	a類		10	18	2			2		鉢1, のみ1, 鋤1	註13
112	福島県郡山市田村町 正直	正直9号墳	第3期					2	1					註109
113	" " "	" 23号墳				7	○	○						註110
114	" 旧安積郡内南 の内					1	1			1	1			註111
115	" 安達郡本宮町 南ノ内	天王壇古墳	第3期			4				1	4		櫛2	註112
116	" " 国見町 塚野目	塚野目所在古墳			1	7	3	3			1			註109
117	" 相馬郡小高町 塚原	轡の森古墳			3	7					5	1		註113
118	" " 鹿島町 寺内	真野49号墳				7	1	1	1			1		註114
119	" " 飯館村	柏崎古墳			1	2					3			註112

1 古墳の石製模造品の変遷

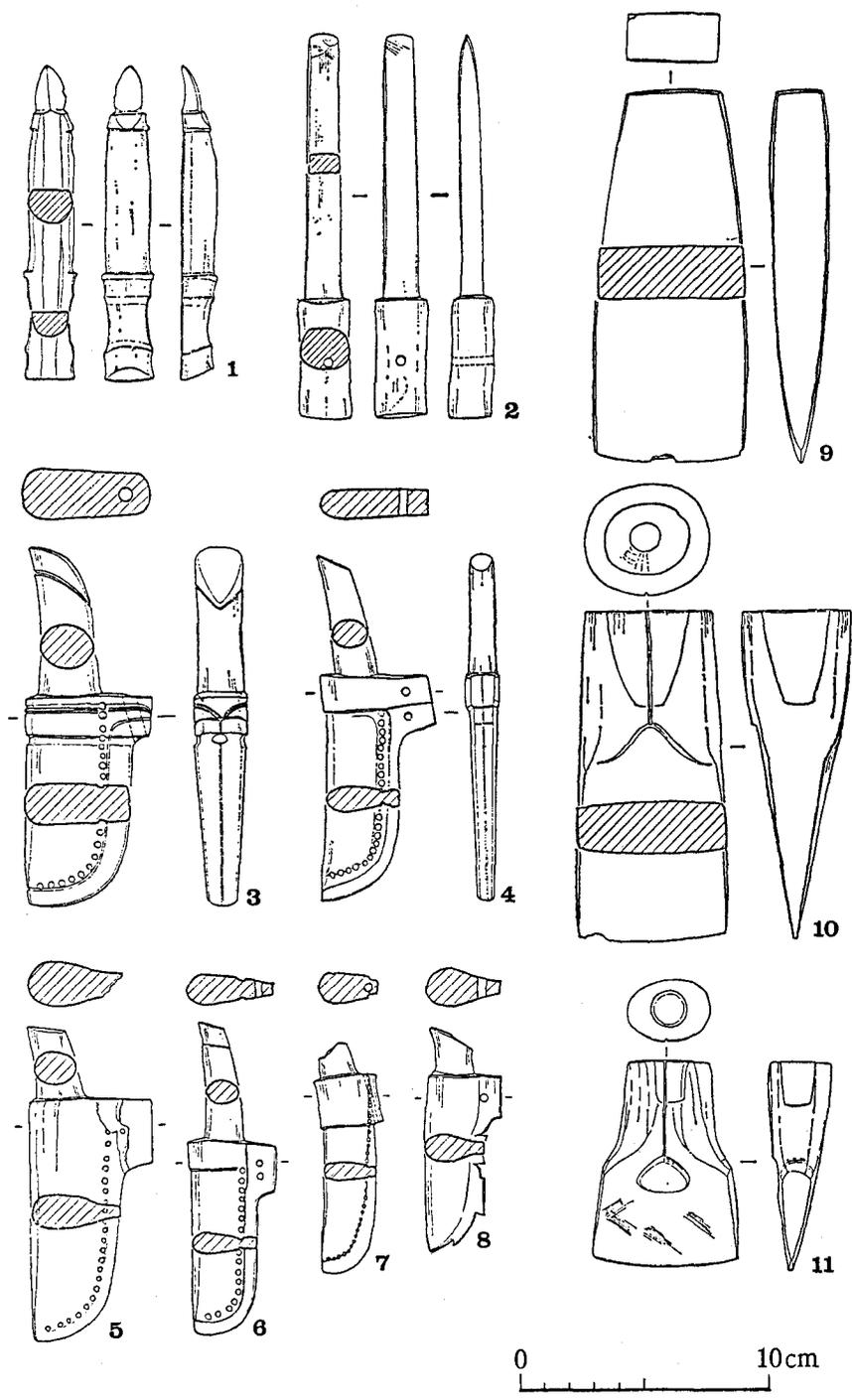


図1 第1期の石製模造品 奈良県富雄丸山古墳 (註11文献原図)  
 1. 鉞 2. のみ 3~8. 刀子 9~11. 斧

第1期は、三重県石山古墳、奈良県富雄丸山古墳、茨城県鏡塚古墳など前期後半から末葉の4世紀後半にさかのぼる古墳の出土例である。石山古墳では、墳丘長約120メートルの前方後円墳の後円部に営まれた3基の粘土槨から、いずれもきわめて写実的な農工具の滑石製模造品が検出されている。すなわち東槨からは刀子124、斧11、鎌3、のみ2、鉈1、中央槨からは刀子52、斧39、鎌1、西槨からは刀子55、斧17、鎌3、のみ1という内訳である<sup>(10)</sup>。このうち、のみと鉈は着柄した状態を、刀子は把をつけ鞘に入れた状態を模しているのに対し、斧と鎌は柄をつけない鉄の部分のみの模造品で、鎌は直刃鎌である。ここでは、東槨の約6,600個の白玉を別にすると、石製模造品はすべて農工具にかぎられることが注目される。一方、現在京都国立博物館が所蔵する伝富雄丸山古墳出土の一括資料<sup>(11)</sup>は、明治末期に発掘されたと伝えられるものであるが、昭和47年の奈良県教育委員会による再発掘調査の結果、径86メートルの大円墳である富雄丸山古墳の出土品であることが確認されたものである<sup>(12)</sup>。この資料の中に、刀子6、斧9、のみ1、鉈1の滑石製模造品があり、いずれも石山古墳出土例に近似し、刀子は把と鞘を、のみ・鉈は柄部をも表現する(図1)。ただ斧のうち1点だけは釜をもたない短冊形斧頭(図1の9)である。

茨城県の鏡塚古墳は、報告者をはじめ多くの研究者が5世紀前半の中期古墳としているが、石製模造品をはじめとする遺物の組合せからは、前期の石山古墳や富雄丸山古墳に併行する前期後半～末葉の古墳である。墳丘長96メートルの前方後円墳の後円部の粘土槨の棺内から刀子10、斧18、鎌2、のみ1、鉈1、鋤1、勾玉2が、石釧や紡錘車とともに出土している<sup>(13)</sup>。それらのうち農工具の形態は他に類例をみない鋤以外はすべて石山古墳例や富雄丸山古墳例に近く、斧のうち2点は短冊形斧頭、鎌は直刃鎌である。鋤とされているものは柄部がなく、三叉の歯をもつ。勾玉はその断面がやや扁平となっている。このほか奈良県佐味田宝塚古墳からも、刀子34、斧1、鎌2、のみ1、剣2、有孔円板1、勾玉10などの滑石製模造品の出土が報告されており、やはり前期にさかのぼるものである<sup>(14)</sup>。鎌は直刃鎌であるが、ここでは農工具以外に剣、有孔円板、勾玉などが出土しているのが注目される。剣は20センチに近い大型品で両面に鍔をもち、茎部をも明確に造り出した精巧なもので、中期以降の粗製品とは異なる。勾玉も各種の大きさがあり、模造品と考えてよいかどうか問題がのこる。有孔円板は径5.2センチで単孔の大型のものであるが、確実に佐味田宝塚古墳の出土品であるかどうか疑問がのこる<sup>(15)</sup>。

このように第1期の石製模造品は、刀子・斧・のみ・鉈などの農工具が中心で、それも第2期以降の中期以降のものに比較するときわめて写実的に造られていることが

1 古墳の石製模造品の変遷

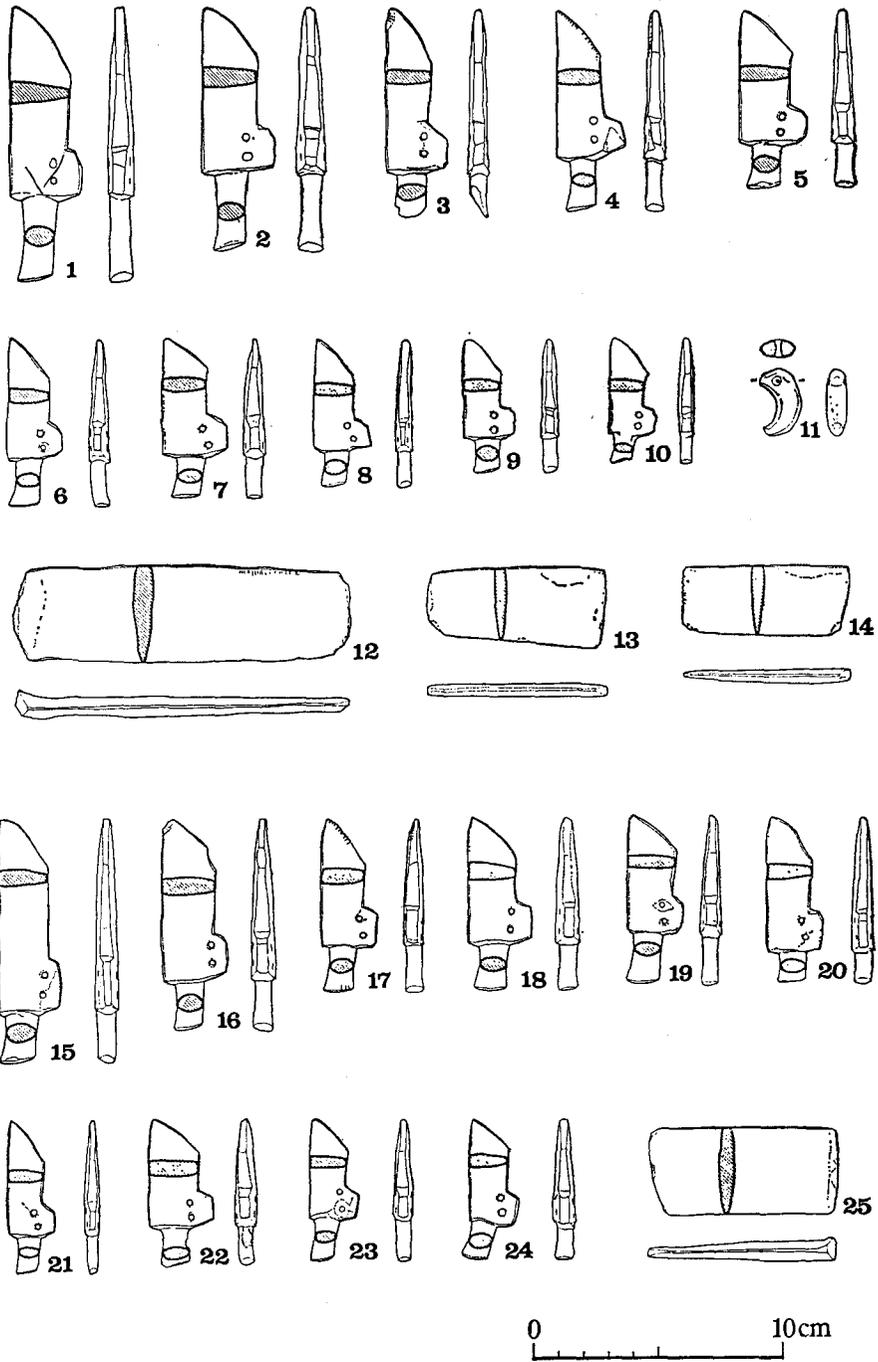


図2 第2期の石製模造品 千葉県石神2号墳 (註20文献原図)  
 上 南側にとまうもの 1~10. 刀子 11. 勾玉 12~14. 鎌  
 下 北杖にとまうもの 15~24. 刀子 25. 鎌

注意されるのである。なお滑石製の勾玉や白玉は他の古墳にもみられるが、通有の玉類と一括出土しており、模造品としてとらえない方がよかろう。ただ鏡塚古墳例は通有の勾玉にくらべやや扁平化しており、模造品としてとらえるほかない。また佐味田宝塚古墳には剣や有孔円板があり、剣については岡山県金歳山古墳例に近い精巧な模造品であり、この段階のものと考えてさしつかえなからう。有孔円板については、次にのべる第2期にもまだみられないところから、すでにこの段階に出現していたものかどうか結論を保留しておきたい。ようするに、この段階は主として農工具の模造品が造られた時期で、一部で剣や勾玉の模造品化が始まっていたものととらえられるのである。

これに対して第2期・第3期は農工具に加えて勾玉や鏡などの模造品化が進み、同種多量の石製模造品が古墳にささげられた段階で、曲刃鎌の模造品の出現以前の第2期と出現以降の第3期に分けることができよう。第2期の例としては、奈良県栗山古墳、同室宮山古墳、群馬県剣崎天神山古墳、千葉県石神2号墳などがあげられる。

栗山古墳は学術調査によったものでもなく、一部の遺物が知られるにすぎないが、まだ断面が扁平化していない滑石製勾玉35、刀子11などが知られており、第1期の例にくらべると刀子の粗製化が著しい<sup>(17)</sup>。また室宮山古墳でも「石室上封土内」などから刀子15、斧1、勾玉623などが検出されている<sup>(18)</sup>。このうち刀子は鞘の縫合せの糸孔を表わしたものが1点だけになるなど、表現の簡略化が進んでいるとはいえ、相反する把部の表現などはまだ写実的なものが多い。勾玉も造りは粗雑ながらその断面は丸味をもち扁平化していない。

関東地方では、群馬県剣崎天神山古墳、千葉県石神2号墳などこの時期の石製模造品を伴った例が数多く知られている。剣崎天神山古墳の石製模造品は土取りの工事中に工事関係者によって採集されたもので、その埋納状態は不明であるが、刀子71、斧1、鎌1、鏡2、罌1、槽1、杵1の7種78点が知られている<sup>(19)</sup>。このうち刀子は、さまざまな形態のものを含むが、大部分は鞘と把を明確に区別して鞘口を表現している。鎌は直刃鎌であり、斧も鋏部を表現している。ここでは農工具以外に鏡や酒道具と考えられている罌・槽・杵を含むことが注意される。石神2号墳例(図2)も直刃鎌を含むこの時期の代表例であるが、特に学術調査によってその出土状態が知られている点で貴重である<sup>(20)</sup>。石製模造品は2つの石枕の配置から2体を同一の割竹形木棺に合葬したことの知られる細長い棺内の、それぞれの石枕の背後から2群に分かれて検出されている。すなわち北枕の背後では刀子10、鎌1、白玉613が雛形鉄器などとともに出土し、南枕の背後でも刀子10、鎌3、勾玉1、白玉1,241がやはり雛形鉄器

1 古墳の石製模造品の変遷

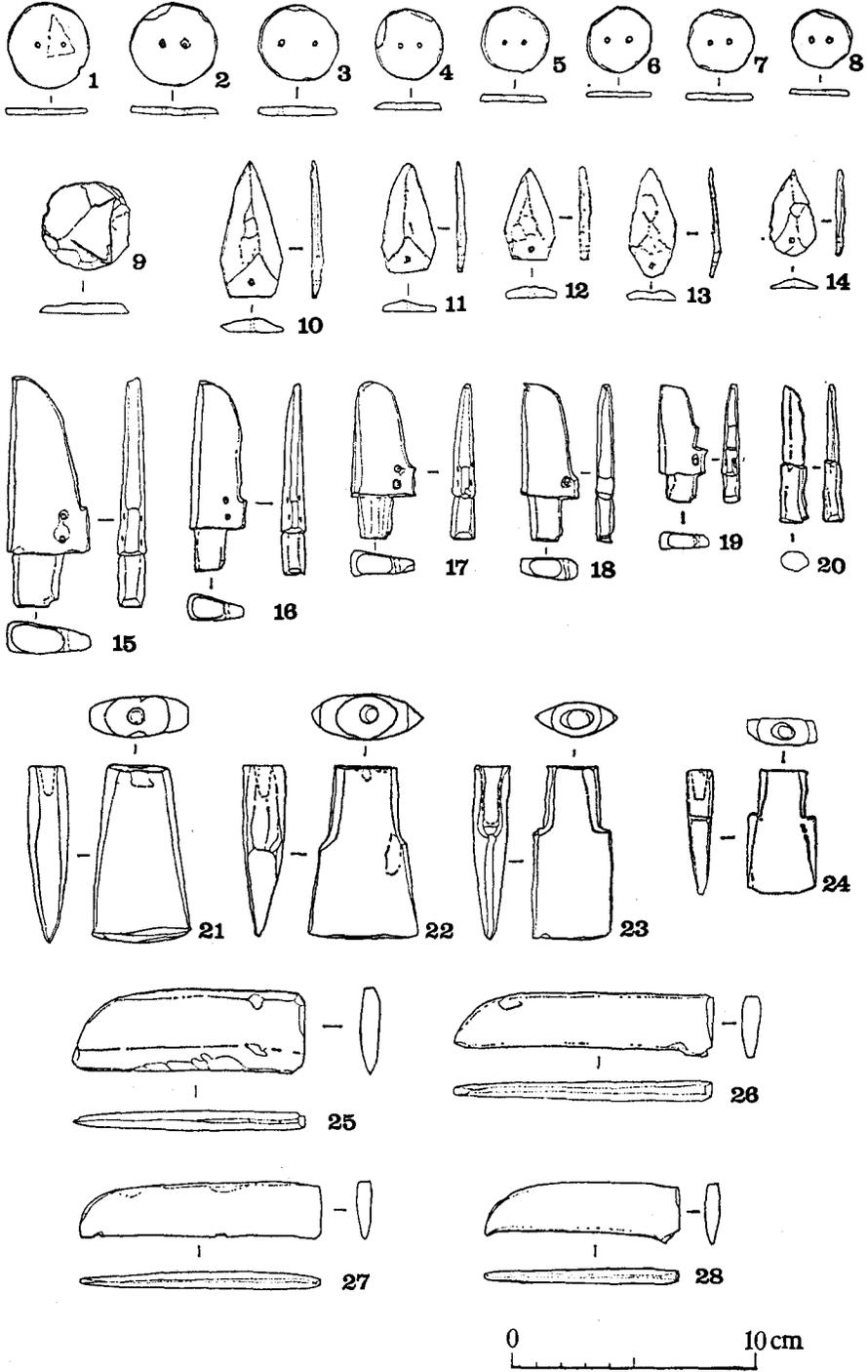


図3 第3期の石製模造品 千葉県多古台古墳 (註30文献原図)

1~8. 有孔円板 9. 円板 10~14. 剣  
15~20. 刀子 21~24. 斧 25~28. 鎌

とともに出土している。刀子はいずれも鞘の背部が直線的となる特徴をもち、大部分は鞘を明確に表現している。勾玉もまた扁平化していない。鎌はすべて直刃である。

このほか、関東地方では千葉県七廻塚古墳、同鶺崎天神台古墳、東京都野毛大塚古墳などで直刃鎌を含む石製模造品類がみられる。七廻塚古墳では剣1、刀子17、斧4、鎌2、白玉773などが<sup>(21)</sup>、鶺崎天神台古墳では2つの埋葬施設から刀子5、斧5、鎌1が白玉とともに出土している<sup>(22)</sup>。野毛大塚古墳には、刀子233、斧1のほか案2、槽1、盤2、甌2、杯1の酒造具と考えられるセットや下駄などがみられる<sup>(23)</sup>。また鎌を含んではいないが、機織具や酒造具の模造品を出土した古墳として知られている群馬県南新田稲荷山古墳も、石製刀子の型式などからこの第2期に位置づけられるものであろう。この古墳からは刀子7、釧1のほか<sup>ちまり</sup>膝1、<sup>おま</sup>箆1、<sup>ひ</sup>梭1、腰掛1などの機織具、案1、埴1など酒造具の一部と推定される模造品が出土している<sup>(24)</sup>。

このように第2期は、農工具以外に勾玉などの同種多量の石製模造品の古墳への供献が始まった段階で、農工具のセット以外に鏡、酒造具、機織具、下駄などの模造品が加わっている。但し、酒造具や機織具のまとまったセットがみられるのは現在のところ関東地方のみで、西日本にはみられない。刀子などは第1期にくらべると形式化が進むが、まだ写実性が失われてはいない。勾玉もまだ断面は丸味をもっている。

第3期は曲刃鎌の模造品が出現した段階で、中期中葉から後半にかけての時期である。鏡の模造品を粗雑にした有孔円板や粗造の剣が出現するのもこの段階である。畿内では京都府久津川車塚古墳や大阪府カトンボ山古墳、関東では群馬県白石稲荷山古墳、赤堀茶臼山古墳などが含まれる。

畿内のこの時期の代表例は百舌鳥古墳群の御廟山古墳の陪塚的位置にあったカトンボ山古墳である。ここでは粘土床状の施設から剣1、刀子360、斧6、鎌13、有孔円板1、勾玉725、白玉約20,000が、子持勾玉、小型銅鏡や鉄製の武器・工具などとともに出土している<sup>(25)</sup>。石製刀子にはさまざまな形態のものが含まれるが、全体に把の短いものが多く、中には鞘と把部の境の鞘口が表現されていないものもみられる。鎌は13例とも曲刃鎌であり、勾玉もその大部分は扁平粗雑な造りのものである。また久津川車塚古墳では、長持形石棺の棺内から刀子40以上、勾玉5,000以上、白玉などが、棺の短辺側石の外側から石槽1が出土している<sup>(26)</sup>。このうち刀子は第2期の諸例とあまり変わらないが、把部の短くなったものが増えている。また勾玉は扁平化が著しく、鎌は含まれていないが、カトンボ山古墳と併行するものと考えたい。

群馬県の白石稲荷山古墳では、2つの礎檣（礎床）から多数の石製模造品が出土している。東檣には剣18、刀子116以上、鎌1、案1、杵1、埴2、箕1が、西檣には

1 古墳の石製模造品の変遷

剣17, 刀子133以上, 勾玉116, 白玉, 釧1のほか盤1, 杵1, 埴2, 下駄1対がみられる<sup>(27)</sup>。鎌は曲刃鎌であり, 剣は鑄はなく, 刃部を研いだ特異なものである。刀子も形式化が著しく, 勾玉は断面が扁平なものもあるが, 丸味を持ったものが多い。酒造具がまだのこり, 勾玉も丸味をおびたものが多いところから, 第3期でも比較的初期のものとして位置づけることができよう。一方, 赤堀茶臼山古墳では2基の木炭塚のうち南塚から刀子21, 勾玉1, 白玉25が出土している<sup>(28)</sup>。刀子は表現が粗雑化して把も小さくなり, 鞘と把部の境がなくなっている。勾玉も扁平な粗造品であり, 白石稻荷山古墳例より後出のものであることは明らかである。このほか群馬県おそね塚古墳からも曲刃鎌の模造品3とともに粗製の刀子35, 斧4, 鏡1, 扁平粗製の勾玉7が<sup>(29)</sup>, 千葉県多古台古墳でも曲刃の鎌6が剣5, 刀子9, 斧5, 有孔円板17以上, 白玉1153と伴出している(図3)<sup>(30)</sup>。以上の諸例からも明らかのように, 曲刃鎌の石製模造品の出現する第3期には, 新しく有孔円板, 小型粗製の剣などが加わり, 刀子の形式化が進むとともに, 勾玉も扁平な粗造品になっていくのである。なお酒造具や下駄などの大型模造品もこの時代のごく初めで姿を消すようである。

古墳に石製模造品を献ずる風習は, 後期の初め頃で終わったと思われるが, その終末期が第4期である。類例は少ないが, 群馬県築瀬二子塚古墳や茨城県丸山4号墳をその例としてあげることができよう。築瀬二子塚古墳は関東地方で最も古式の横穴式石室をもつ古墳で, 石室内から剣2, 刀子3, 斧2, 鎌1, 鏡1, 有孔円板22, 甲2,

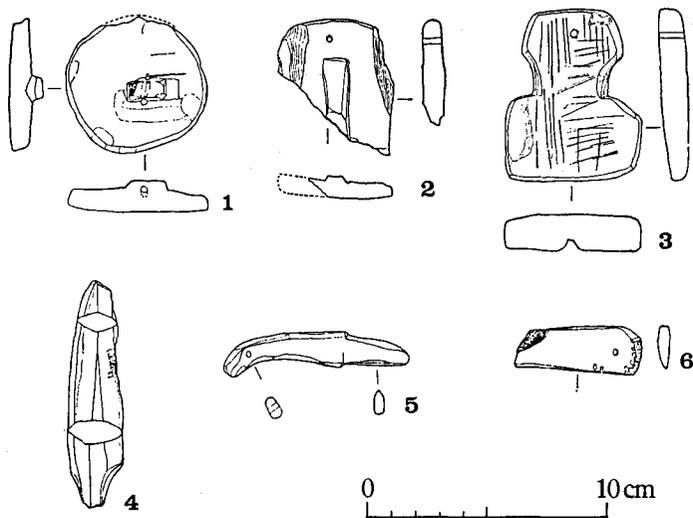


図4 第4期の石製模造品 群馬県築瀬二子塚古墳(註31原田論文原図)

1. 鏡 2. 盾 3. 斧 4. 剣 5. 刀子 6. 鎌

盾3などの石製模造品が出土している(図4)<sup>(31)</sup>。いずれも粗製品であるが、特に刀子は鞘部と把部の区別がなくなり、石製模造刀子の出現以来一貫して鞘口の突出部に穿たれていた緒通し孔が把の先端部に移っている。また斧なども扁平化が著しく、袋にあたる部分と身の間がくびれた形状を呈している。一方の丸山4号墳も古式の横穴式石室をもつ古墳で剣7、双孔円板36、勾玉3などいずれも粗雑な造りの石製模造品が出土している<sup>(32)</sup>。

このほか、石製模造品の組合せからその時期を明確にするのは困難であるが、福岡県飛山1号墳<sup>(33)</sup>の竪穴系横口式石室から出土した有孔円板4、白玉950や、同竹並A-4号横穴<sup>(34)</sup>から出土した剣1、白玉6など、農工具の模造品を伴わず有孔円板や剣の模造品をもつ一群には、この時期に下るものが少なくないと思われる。なお飛山1号墳は須恵器の型式などから6世紀前半、竹並A-4号横穴は横穴の型式やその他の遺物などから6世紀初頭頃と考えて大過なからう。やはり横穴式石室から剣2、刀子2、有孔円板1の石製模造品を出したとされる群馬県金堀古墳<sup>(35)</sup>もこの時期のものである。

以上、概観したところからも明らかなように、古墳に滑石製模造品が副葬ないし供献されるのは、古墳時代でも前期の末葉から後期初頭にかけての限られた時期であるが、その間にもその組成やそれぞれの形態に大きな変化が認められるのである。まず第1期は古墳時代の前期末葉で、農工具の石製模造品化が始まった時期である。一部で石製の剣が出現するほか、勾玉が白玉とともに滑石で造られるが、これは第2期以降の粗製の模造品とは区別すべきであろう。第2期中期前半になると農工具類の模造品が形式化するとともに、粗製の勾玉の模造品などが多量に供献されるようになる。酒造具や機織具の模造品が造られたのも主としてこの時期である。第3期は中期の中葉から後半の時期で、曲刃鎌の模造品の出現をもって第2期と区分できる。各種の農工具もさらに粗雑になり、勾玉なども扁平な板状のものになる。さらに剣の粗製模造品や第2期に出現していた鏡の模造品が粗製化したと思われる有孔円板が出現する。第4期は中期末から後期初頭で、粗雑化した農工具もみられるが、むしろ有孔円板や剣などが顕著になるのである。

## 2 古墳の模造品と祭祀遺跡の模造品

前節で検討したように、古墳から検出される滑石製模造品の組合せには、時期によって大きな変化が見られるのである。よくいわれる刀子、鎌、斧などの農工具を中心

## 2 古墳の模造品と祭祀遺跡の模造品

とする古墳と有孔円板や剣を中心とする祭祀遺跡という模造品の組成の相違は、実は遺跡の性格もさることながら、時期の差によるところが大きいのではないかと考えられるのである。次にこの点を古墳以外の遺跡における石製模造品のあり方と比較して検討してみよう。

古墳以外の遺跡で滑石製模造品を伴う遺跡としては、いわゆる祭祀遺跡と考えられているものと一般の集落遺跡及びこれらの模造品の生産遺跡などがある。このうち生産遺跡である玉造遺跡については、そこで生産される模造品には古墳に供献されるものも、その他の祭祀遺跡や集落で用いられるものをも含んでいるわけであるから、ここでは一応除外して考えるべきであろう。したがって、ここでは祭祀遺跡と一般の集落遺跡が検討の対象となる。

古墳時代の祭祀遺跡のなかで、祭祀に用いられ、あるいは神に供献された祭祀関係遺物の時代的変遷が最も明確にとらえられるのは福岡県の沖ノ島の祭祀遺跡群<sup>(36)</sup>であろう。沖ノ島の祭祀はまず古墳時代の前期後半ないし末葉から始まる。この段階の代表例である17号遺跡では、21面の鏡をはじめとして剣、刀、刀子などの鉄製の武器・工具類、勾玉、管玉などの装身具類のほか石釧、車輪石などの石製腕輪形宝器が出土しているが、滑石製品としては勾玉と臼玉がみられるにすぎない。滑石製勾玉はまだ丸味をもった精製品で、古墳における石製模造品の第1期の場合と同様、これらの滑石製勾玉や臼玉は模造品とは考えない方がよさそうである。すなわち、この段階には鏡、武器、玉類、それに碧玉製の腕輪形宝器など実物の宝器類が神に供献されているのである。沖ノ島で滑石製の模造品類が出現するのは、古墳時代中期の中頃、5世紀中葉前後と想定されている21号遺跡である。ここでは鏡1面のほか鉄製の武器・農具、玉類、土師器などとともに剣、有孔円板、勾玉、臼玉などの滑石製模造品類や武器や農具などの鉄製雛形品も出土している。そして6世紀中葉に比定される7号遺跡では鉄製雛形品はみられるが滑石製品は臼玉をのぞくと全くみられなくなっているのである。沖ノ島では8世紀初頭を中心とする5号遺跡などでも大型化した円形及び方形の臼玉がみられ、さらに8世紀後半から9世紀の1号遺跡では宗像独特の人形、馬形、舟形、勾玉、鏡(円板)などの滑石製形代類が大量に供献されている。しかし古墳時代の滑石製模造品については、5世紀中葉前後に、剣、有孔円板、勾玉、臼玉などの供献が知られるのみで、4世紀後半にはまだみられず、また6世紀中葉にはもう見られなくなっているのである。

こうした沖ノ島の祭祀遺跡群における滑石製模造品のあり方は、その他各地の祭祀遺跡のあり方を検討しても基本的には変りないようである。古墳時代の祭祀遺跡にお

ける祭祀関係遺物の組成の変化については、すでに亀井正道氏が『建鉢山—福島県表郷村古代祭祀遺跡の研究—』において整理しておられる<sup>(37)</sup>。氏は4世紀末から7世紀中葉に至る時期の祭祀遺跡を、特にその遺物の組成のあり方を中心に6期に区分される。第1期には沖ノ島17号遺跡や奈良県石上神宮禁足地などがあり、実物の鏡・武器・玉類などを伴うもので、滑石製模造品類はまだ出現していない段階。4世紀末から5世紀前半。第2期には沖ノ島16・19号遺跡、奈良県布留遺跡、福島県高木遺跡などがあり、実物の宝器類とともに剣、刀子、斧、鎌、鏡、有孔円板、勾玉などの滑石製模造品が多量に出現する時期で、5世紀中葉前後。第3期には福島県三森遺跡、東京都狭間遺跡などがあり、滑石製模造品を多量に出土するという点では第2期と変わらないが、その品目が次第に剣、有孔円板、勾玉、白玉に固定化してくる段階。5世紀後半から6世紀初頭。第4期には静岡県洗田遺跡、和歌山県坂田山遺跡などがあり、滑石製模造品も依然として存在するが数が著しく減少し、かわって土製模造品が出現する段階。6世紀前半から中葉。第5期は静岡県坂上遺跡などのように滑石製模造品がほとんどなくなり、かわって前段階に出現した土製模造品が一般的となる段階で、6世紀後半から7世紀初頭。第6期は千葉県東長田遺跡などのように土製模造品も少なくなり、手捏土器が主体となる時期で7世紀前半から中葉。

この亀井正道氏の整理は、すでに20年近く以前の仕事であるが、実年代の比定などに異論はありえるとしても、永年の研究にもとづいて古墳時代の祭祀関係遺物組成の変遷を明確にあとづけたもので、現在でも大きく変更する必要はないものと思われる。特にいま問題としている6世紀中葉以前については、さきにみた沖ノ島における遺物のあり方とも一致するのである。いま石製模造品のあり方を中心にみると、これが祭祀遺跡に献じられるのは第2期の5世紀中葉頃からで、その内容も高木遺跡などにみられるように刀子・斧・鎌などの農工具類も決して少なくないのである。まさに前節で筆者が整理した古墳の模造品の第3期と共通の様相を示しているのである。さらに祭祀遺跡の第3期の5世紀後半から6世紀初頭になると農工具の模造品がほとんどみられなくなり、剣、有孔円板、勾玉、白玉に固定化されるというが、これまた古墳の模造品の第4期の様相にきわめて近い。古墳にはまだ遺存する農工具の模造品も決して姿を消したわけではない。最近調査された群馬県富岡市久保遺跡<sup>(38)</sup>は、伴出の須恵器・土師器から明らかに6世紀前半の祭祀遺跡であることが知られるもので、ここでも剣、有孔円板、勾玉、白玉にくらべると数はきわめて少ないが、刀子、斧、鎌などの農工具の模造品の遺存もはっきりと認められるのである。

なお、この亀井氏の設定された第2期の布留遺跡の年代について、楢山林継氏はこ

## 2 古墳の模造品と祭祀遺跡の模造品

れを5世紀初頭から中葉以降までとみておられる<sup>(39)</sup>。確かに亀井氏がとりあげておられる布留遺跡の遺物群の年代を限定して考えるのは危険であろう。布留遺跡についてはその後も調査が継続され、各時期の遺構、遺物群が検出されつつあるが、亀井氏がとりあげられた1953～55年調査の布留町字堂垣内地区では、3×5メートルの楕円形の敷石の広がりがあり、その敷石の上面や石の間に多数の有孔円板が散乱していたという。また石敷列の北側には散乱した円筒埴輪、朝顔形埴輪、土師器、滑石製有孔円板などがあり、この調査区で採集された滑石製模造品の総数は、勾玉193、有孔円板133、白玉3195におよぶという<sup>(40)</sup>。また別に須恵器なども出土しており、この地区が一種の祭場であったことは確実であるが、その祭祀は古墳時代中期の一定期間存続したものと考えるべきで、その年代はさきの古墳の石製模造品の編年では、第2期から3期におよぶものと考えられるべきであろう。布留遺跡でのあり方から考えると、祭祀遺跡に石製模造品が出現するのは、まだ丸味をもった滑石製勾玉が多量化する、古墳の石製模造品の第2期からのようである。ただそれがどれほど普遍化していたかは不明である。

一方、集落遺跡における滑石製模造品のあり方はどうであろうか。この問題についてもすでに高橋一夫氏や椋山林継氏が関東地方の場合について考察を試みておられる<sup>(41)</sup>。いまここで問題にしている滑石製模造品の組成及びその時期的変化については両者の結論はほぼ一致している。すなわち、関東地方の一般の集落遺跡の堅穴住居跡に滑石製模造品がみられるようになるのは、土師器の型式では和泉式の時期からで、それもその前半期（和泉Ⅰ式）の例は少なく、一般化する的是その後半期（和泉Ⅱ式）からという。そして鬼高Ⅰ式の時期にその出土率は最も高くなり、鬼高Ⅱ式の時期には著しく減少する。模造品の種類はその全期間を通じて剣、有孔円板、勾玉、白玉が中心で、農工具の類はほとんどみられないようである。高橋・椋山両氏の整理された東日本の状況は、基本的には西日本にも共通するものと思われ、集落内の一般の住居内での祭祀に石製模造品が用いられるのは、5世紀中葉から6世紀後半までで、その中心は5世紀後半から6世紀前半ということになろう。またここでは古墳に一般的な農工具の類がほとんど見出せないことが注意されるのである。

集落遺跡における滑石製模造品のあり方は、その用いられる時期については基本的に祭祀遺跡の場合と相違ないが、ただ祭祀遺跡の場合には見ることできた刀子、斧、鎌などの農工具が全くといってよいほど見られないのである。これは集落内の家族単位の祭祀の性格を示唆するようで興味深い。いずれにしても、古墳の滑石製模造品の第1期の時期には、一般の祭祀遺跡や集落内では滑石製模造品は全くみられない

のであって、滑石製模造品の製作がまず古墳の副葬品である農工具から始まることを示している。そして第2期の農工具以外に勾玉の模造品の大量製作が始まる段階になって、はじめて古墳以外の祭祀遺跡でも勾玉や白玉の供献が始まり、さらに第3期になると剣、鏡、有孔円板、勾玉、それに農工具などがさかんに供献されるようになったらしい。この段階には古墳では依然として農工具が模造品の中心であるのに対し、祭祀遺跡では剣、有孔円板、勾玉、白玉が中心となるが、農工具類も少なからず認められるのである。さらに第4期になると、祭祀遺跡では剣、有孔円板、勾玉、白玉のセットの固定化が進み、古墳でも農工具とともに剣、有孔円板、勾玉を伴う例が多くなり、農工具を欠く場合もみられるようになる。そして6世紀の後半には、古墳でも祭祀遺跡や一般の集落遺跡でも滑石製模造品はみられなくなるのである。

このように滑石製模造品の製作は、4世紀後半に古墳に副葬される滑石製の農工具のセットから始まったものであり、古墳以外の祭祀遺跡などに供献されるようになるのは、5世紀前半になってからであること、5世紀中葉以降も古墳では農工具の模造品が中心であるのに対し、それ以外の祭祀遺跡等では剣、有孔円板、勾玉、白玉が中心となることが明確になった。ただ古墳でも5世紀末以降になると、むしろ農工具以外の剣、有孔円板、勾玉などが中心となるのである。こうした古墳の滑石製模造品にみられる「農工具」とその他の「剣・有孔円板・勾玉」などとの性格の同異を追求するには、古墳におけるこれら滑石製模造品の扱われ方をさらに細かくみてみる必要がある。次にこの点を検討してみよう。

### 3 古墳における石製模造品のあり方

古墳から滑石製模造品が出土する場合、その出土位置は必ずしも一定しておらず、さまざまである。いまこれを整理すると、埋葬施設内の棺内から出土するもの（a類）、埋葬施設内であるが棺外から出土するもの（b類）、墳丘上から出土するもの（c類）の3つの類型に分けてとらえることができよう。

#### 〔a類〕

棺内に置かれたもので、多くの場合、棺端部に置かれている。石山古墳では同一の墓壇に営まれた三つの粘土槨のそれぞれの棺内から滑石製模造品が検出されている。そのうち西槨では、鏡や玉類の置かれた頭部と反対の足側部分に滑石製の刀子48、鎌2、のみ1が車輪石6とともに置かれ、さらに頭部側の棺端には滑石製の刀子7、斧

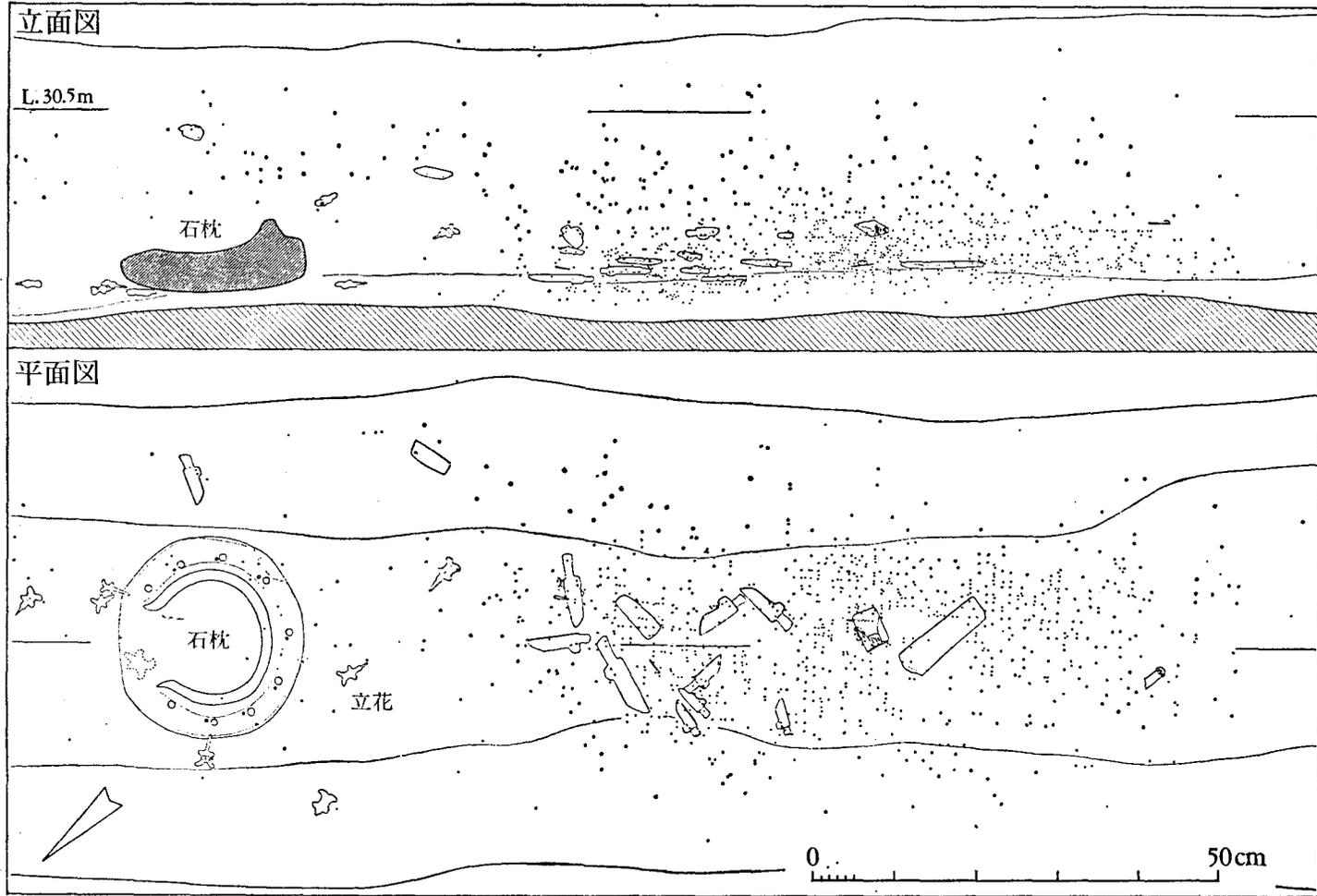


図5 千葉県石神2号墳の棺内南枕にともなう石製模造品の出土状態 (註22文献原図)

6, 鎌1が鉄斧, 鉄鎌, 鉄鋏先や鋏形石10, 石釧13, 車輪石38など多数の碧玉製腕輪形宝器や白玉約1600とともに, 足側の棺端部には滑石製の斧7, 紡錘車4が鉄刀子, 鉄鎌, 鉄鉈とともに置かれていた<sup>(42)</sup>。他の2槨でも基本的には同様で, ここでは滑石製農工具類が鉄製の農工具類や腕輪形宝器と一括して棺端部や足部に置かれていることが注意される。鏡塚古墳の場合も, 粘土槨の棺内の頭部想定位置より約3m足側の部分で滑石製の刀子10, 斧18, 鎌2, 鉈1, のみ1, 鋤1が紡錘車11, 石釧2とともに「恰も榊の小枝か何かに懸けられて棺内に納められたものが, その後有機質の腐朽と共にそのまま崩れ落ちて積み重なったままの状態で見つかる<sup>(43)</sup>」されている。

このように棺内に農工具を中心とする滑石製模造品がまとめて置かれる例は, 第2期や第3期にもみられる。第2期の石神2号墳では, 同一の棺内の2個の石枕のそれぞれ背後の部分から農工具の石製模造品類が, やはり農工具の鉄製雛形品類や白玉と一括出土している。北枕側では滑石製の刀子10, 鎌1が多くは雛形品と思われる鉄製の斧5, 鎌3, 刀子, 鉈2, 錐1や白玉613とともに, 南枕側では滑石製の刀子10, 鎌3, 勾玉1がやはり雛形品の鉄製斧2, 鎌1, 錐1などや白玉1241とともに検出されている。これらの遺物はきわめて雑然と散らばっており, 特に南枕側では平面的には約1.6メートル, 立面的には棺床部から約30センチ上方までの範囲にちらばっている(図5), 報告者は「埋納の際玉の緒を切るという行為が行われたことも考える必要がある」とされるが<sup>(44)</sup>, それであれば白玉などは棺内の底部に散らばり, このような高低差は生じないはずである。むしろこのような立面的な散らばりなどから, 樹枝などにかけられ, そのまま棺内に納められていたものと考えた方が自然であろう。この状態に比べると, さきの鏡塚古墳の例などはむしろきわめて限られた範囲にまとまっていて, 何らかの容器にでも納められていたものと考えべきであろう。

第3期の白石稻荷山古墳の西槨では, 長さ5メートル程度と想定される長い棺のほぼ中央に遺骸を納め, その前後の空間に滑石製模造品を中心とする遺物が置かれていた。まず頭部の背後には滑石製の刀子116以上と剣17がひとかたまり, また滑石製勾玉116が別のかたまりとなって置かれ, 近くに銅製の刀子柄や鉄器の残片, 櫛などがあつた。一方足側部には石製模造品の盤1, 杵1, 埴2, 釧1, 下駄1対がまとめて置かれていた。また赤堀茶臼山古墳の南槨でも棺内のほぼ中央部, 神獸鏡や短甲, 鉄斧などに近接して滑石製刀子21が雑然と積まれており, 滑石製勾玉1と白玉ははなれて東端部にあつたという。

またやはり第3期の岡山県随庵古墳では, 堅穴式石室内に納められた割竹形木棺の棺端部から, 滑石製の有孔円板6, 勾玉1, 白玉75が出土している。有孔円板6が半

### 3 古墳における石製模造品のあり方

円形に並んで検出されたところから、報告者は何んらかの有機質のものにとり付けられていた可能性を考えておられるが<sup>(45)</sup>、滑石製臼玉や勾玉の散らばりからみると、これはむしろ樹枝などにとり付けられていたものと考えた方がよいかも知れない。このほか第3期の久津川車塚古墳では、長持形石棺内より多量の滑石製刀子、勾玉、臼玉などが、棺の両短辺側石外に設けられた小石室内の一方から滑石製の槽1が出土している。このうち棺内の勾玉や刀子については遺骸の埋葬後「棺内の空所に散布」したものと考えられているが<sup>(46)</sup>、これも樹枝などにとり付けられて納められたものと考えた方が自然であろう。

このように棺内から滑石製模造品が出土する場合にもさまざまな類例がある。その棺内への納め方も石山古墳のように棺端部などに集積したり、鏡塚古墳、白石稻荷山古墳、赤堀茶臼山古墳のように、何らかの容器に入れて納めたと想定される場合、さらに石神2号墳のように樹枝などにかけてそのまま納めたと想定される場合などさまざまである。ただ白石稻荷山古墳の西槨で、農工具の模造品のセットと酒造具の模造品のセットが明らかに分けて納められ、また鏡塚古墳でも、滑石製勾玉と臼玉が農工具の模造品群（紡錘車を含む）とは別に検出されていることから明らかなように、一般に農工具のセットはそれのみで一括して扱われたようである。また石山古墳や石神2号墳例などからも明らかなように、鉄製農工具や鉄製雛形の農工具類と共存する場合も少なくないのであり、滑石製農工具の副葬は明らかに鉄製農工具の副葬の風習の延長としてとらえられるのである。事実、その出土位置も、前期後半における鉄製農工具の副葬位置と基本的に共通している。それは前期前半の竪穴式石室においては、主として棺端部に近い棺外に置かれていたものが、粘土槨など棺外に空間をもたない埋葬施設の採用以降、棺内の棺端部分などに持込まれるようになったものである。

ただ、こうした出現期古墳以来の鉄製農工具副葬の風習の延長としての滑石製農工具の扱いは、中期の後半以降には少し変化し始めるようである。第3期の多古台古墳の埋葬施設は木棺を土壌内に直葬したものであるが、滑石製模造品のうち、剣2、刀子9、斧5、鎌6、鏡2、有孔円板14以上、臼玉多数が棺内の棺端部分から、同じ滑石製模造品のうち剣3は棺外の土壌内から検出されている。ここでは、滑石製の農工具が、剣、鏡、有孔円板などの模造品と明らかに一括して扱われており、農工具のセットのみを石製模造品のなかでも別扱いする考え方が弱くなってきていることを示すものであろう。

このほか、大量の滑石製模造品を出土した第3期のカトンボ山古墳の場合も、各種の滑石製模造品や鏡、大型鉄斧などは粘土床上に据えられた「木板」上に配されてい

たと推定されている。さらに調査者は、これを人体埋葬をともしない遺物のみを埋蔵した特異な古墳で、主墳の御廟山古墳に対して遺物の埋蔵のみを目的とした陪塚として理解しておられる<sup>(47)</sup>。しかし、この東西に主軸をおく主体部以外にも、その約2.5メートルの北側に並行して東西方向に置かれた剣や「蜘蛛手形鉄器」が検出され、さらに、木板の西端からさらに約1メートル西側の付近にいずれも南北方向に置かれた直刀、鉾、鉄鏃群や「有機質の盾状の遺物」が検出されている。したがってこの墳丘上には東西方向に2基、南北方向に1基の少なくとも三つの埋葬施設が営まれていた可能性も依然としてのこっているように思われる。ただその場合でもこの大量の石製模造品群を主墳の御廟山古墳との関連でとらえるべきだとする調査者の見解は正しいであろう。このカトノボ山古墳についてはまだまだ多くの問題がのこるが、ただここでは滑石製の農工具が多量の滑石製勾玉と一括して扱われていたこと、多量の石製模造品が鉄製武器をともしならず、鏡及び鉄製農工具と共存していたことに注意しておきたい。

#### 〔b類〕

石室内あるいは土壌内の棺外から滑石製模造品が出土するもので、第4期の例は多いが、第3期までの例はあまり多くない。

第2期の例としては、大阪府津堂城山古墳例がある。竪穴式石室内の長持形石棺の短辺側石の東側の部分から滑石製勾玉29などが出土しており、また滑石製の剣1、刀子2なども棺外の出土品らしい<sup>(48)</sup>。なお、奈良県室宮山古墳でも竪穴式石室内の長持形石棺のまわりから滑石製勾玉などが出土しているが<sup>(49)</sup>、これは2回以上の盗掘の際、石室外から流入したものらしい。

第3期の初期の例と想定される滋賀県新開1号墳では、木棺を直葬した北棺の、木棺の両端に置かれた割石群の間から、有孔円板1が臼玉116とともに出土しており、また前述のように京都府久津川車塚古墳の長持形石棺の両端部に付設された小石室内から滑石製の槽が出土している。なお、奈良県兵家6号墳の西槨の棺内中央部から鉄製農工具類とともに検出された刀子の石製模造品10は「その下部より鉄製刀子が検出されているところより棺上に置かれた可能性が強い」<sup>(50)</sup>とされている。しかし鉄製農工具の近くに、やや広く散らばって出土していることを重視すると、これも樹枝につけられ棺内に納められたものと考えた方がよさそうである。ただ福岡県双山5号墳では箱式石棺の天井石上から滑石製有孔円板7があたかも紐で連ねられたような状態で、臼玉などとともに出土しており、墓壇内の棺上に石製模造品が置かれた例がない

### 3 古墳における石製模造品のあり方

わけではない。

第4期になると、横穴式石室や横穴から石製模造品が出土する例が多くなるが、その大部分は棺外遺物と推定される。福岡県塚堂古墳では、前方部の横穴式石室の玄門を玄室内へ入ったすぐ右側の部分で、有孔円板1及び多量の白玉が鏡（小型仿製神獸鏡）とともに相当のひろがりをもって散ばっていた<sup>(51)</sup>。また同飛山1号墳でも堅穴系横口式石室の玄門を入った右側部分で有孔円板4と多量の白玉がやはり相当広い範囲に散ばっていた<sup>(52)</sup>。これらはその出土状態から推測すると樹枝などにかけられたまま石室内へ納められたものと考えてさしつかえないものと思われる。また福岡県老司古墳の1号石室は、堅穴系横口式石室であるが、ここでは玄室のほぼ中央部から滑石製勾玉20数点が仿製の方格規矩鏡とともに検出されている<sup>(53)</sup>。それが棺内に置かれたものか棺外のものか不明であるが、その南側には被葬者の着装品と思われる硬玉勾玉、碧玉管玉、ガラス小玉など玉類の一群があり、それらとは別に扱われたものであることは確かなようである<sup>(54)</sup>。

このように滑石製模造品が埋葬施設内の棺外から出土する例にもいろいろな場合があり、さまざまな用いられ方をしていたことが類推される。ただそれらの中で、これらの石製模造品を樹枝などにつけて埋葬施設内に納めたと推定される例が少なからず見出されることに注意しておきたい。

#### 〔c類〕

墳丘上から滑石製模造品が検出されるもので、墳丘上で行われた祭祀にともなうものと推測される。第2期の奈良県室宮山古墳では、「石室上封土内」、「現地表下約10センチばかりの所に随所に」滑石製の勾玉、刀子、斧、白玉などが検出されており、その出土地点は「古墳築造時の墳丘表面」と想定されている<sup>(55)</sup>。またやはり第2期の岡山県金蔵山古墳でも、墳頂部から滑石製の刀子、鎌、剣などが発見されており、やはり墳丘上で検出された方格八乳鏡や土師器の壺、高杯や籠目皿とともに墳丘上における祭祀に用いられたものと考えられている<sup>(56)</sup>。このほか大阪府の古市古墳群の墓山古墳では、後円部の頂上部から2個の靱形埴輪にともなって数百個の滑石製勾玉が掘り出されている<sup>(57)</sup>。この靱形埴輪の表面には多くの小孔があり、森浩一氏はそこに小枝をさして多量の滑石製勾玉をとり付けていたものと推定しておられる。また同じ大阪府の百舌鳥古墳群の七観古墳でも墳頂部から滑石製勾玉2が採集されている<sup>(58)</sup>。このほか福島県柏崎古墳では剣、刀子、有孔円板、勾玉など<sup>(59)</sup>が、また同藩の森古墳では剣、刀子、有孔円板など<sup>(60)</sup>が、それぞれ墳頂部のきわめて浅い位置で出

土している。

このように墳頂部で石製模造品が検出される例は必ずしも少なくないが、それらの多くが、第2期ないし第3期初頭と想定される畿内あるいは吉備地方の大型古墳ないしその陪塚的位置にある古墳であることが注目される。このような墳丘上における滑石製模造品を伴う祭祀がまず畿内地方で始まったことを推定させる材料といえよう。さらにこの場合の滑石製模造品は、刀子などの農工具もみられるが、勾玉が圧倒的に多くなっている。依然として農工具が中心となっている同時期のa類の棺内の石製模造品とはその品目の組合せを大きく異にしていることが注意されよう。またa類でも京都府久津川車塚古墳の石棺内の石製模造品は勾玉が中心となっており、この第2期から第3期にかけて、主として棺内へ納められた農工具の模造品とは別に、樹枝に大量の勾玉を中心に刀子や斧をも含む各種の模造品を付けて葬送祭祀に用いる風習が成立していたことがうかがえる。それはおそらく同時代の一般の祭祀において用いられたものと共通するものであったと思われる。そしてその模造品の組合せは、次第に勾玉を中心とするものから白玉が多量化するとともに、勾玉にかわって剣や有孔円板の比率が高くなっていったものと想定されるのである。第4期に石室内などに持込まれる石製模造品もこれと共通の性格をもつものと考えられよう。

このように、古墳にみられる滑石製模造品には、前期古墳の副葬品の農工具類を石におきかえた農工具のセットが中心になるものと、おそらく古墳時代の中期になって、一般の祭祀においても用いられるようになった勾玉を中心に鏡や剣など各種の模造品をまじえた滑石製模造品の二者が見出せるのである。このうち前者は第1期から第3期まで存続し、後者は第2期に始まって第4期に及ぶのである。また前者も樹枝に垂下される場合があったと推測されるが、特に後者は、むしろそれが一般的であったものと思われるのである。

#### 4 農工具の石製模造品化の意味

すでにのべたところからも明らかなように、古墳時代の祭祀関係遺物としてもっとも普遍的なものと考えられている滑石製模造品は、当初まず古墳に副葬されている鉄製農工具の石製品化から始まったものであった。やや遅れて勾玉や剣あるいは鏡などの石製模造品も出現するが、最初はその量もあまり多くなかった。それでは何故、古墳のさまざまな副葬品のうちでまず農工具から模造品化が始まったのであろうか。この点は滑石製模造品それ自体の本質を考える上にも重要と思われるので、若干の考察

#### 4 農工具の石製模造品化の意味

を加えておきたい。

古墳の各種の副葬品のなかで、まず最初に農工具が石製模造品化されるということは、古墳の副葬品のなかでも農工具の副葬がきわめて重要な意味をもっていたことを示している。この古墳に副葬されている農工具とは一体何であったのだろうか。小林行雄氏はこの農工具について、「こういう一見農民的な道具が古墳の副葬品のうちにくわえられているのは、当時の豪族も日常は農民的な生活をいとなんでいたというような理由からではあるまい。これらの道具には祭祀の実施に必要な建築用具としての用途も、同時に考えられるからである」<sup>(61)</sup>としておられる。さらにまた別の著書では「これは農具と工具ではなく、すべてが建築用の工具であったと思われる。その建築は、もちろん神を祭るためのものであろう。神を祭るときに、神の象徴ともしうる鏡・剣・玉のほかに、まつりの場所をつくる工具があるということから考えると、前期の古墳の副葬品の性格は、むしろ司祭者的なものであると、いいあらわすことができる」<sup>(62)</sup>ともされる。残念ながらこれ以上詳説しておられないので、その真意をまちがいなく理解することは困難であるが、おそらく神まつりの場をつくる役割りをもっていた司祭者としての被葬者の性格を象徴する副葬品と解釈しておられたものと思われる<sup>(63)</sup>。きわめて魅力的な解釈ではあるが、はたして古墳の農工具は建築用具であろうか。

いま前期の古墳における鉄製農工具のあり方をみてみると、確かに鎌、鍬などの農具と斧、鉋、刀子などの工具は完全に一つのセットになっていて、両者を分離することは困難である。またそれらの中では、斧、鉋、刀子などの工具が多く、農具としては鎌が目立つくらいで、鍬、鋤などはむしろ少ないことは事実である。ただ、それらの工具のうち斧頭については、その側面形を観察すると縦斧ではなく横斧、すなわち手斧としての機能を予想して造られたものが多く、手斧、鉋、刀子の組合せからは木工具としての性格が強くみられるのである。このことは、手斧、鉋、刀子、鎌の基本的な組合せには一見農具が少なくみえるが、当時の農具としてはまだ木製品が一般的であることを考慮すると、これらのセットが農具及び農具製作用具にほかならないことを示唆しているものとも解釈できるのである。

古墳に副葬された鉄製農工具は、すでにのべたように、前期の末葉には一部の古墳では石製模造品化する。さらに中期になると農工具の石製模造品の製作・副葬が一層進展し、鉄製品と共用される。またこの段階になると鉄製品のなかにも雛形品化するものも少なからず見出せるのである。この石製品化及び鉄製品の雛形化は基本的には共通の現象として理解できるものであり、それが実用品というよりは、儀礼に用いる

祭器にほかならないことを明確に示している。特にその石製模造品化は、石で造って来世まで保持しなければならないほどその祭器を用いた祭祀の執行が、古墳の被葬者にとって重要なものであったことを物語っている。こうした農工具の石製模造品の副葬は後期になるとあまり見られなくなるが、鉄製農工具やその鉄製雛形品の副葬は、少なくとも後期中頃（6世紀中葉）までは確実に続くのである。後期初頭に位置づけられる和歌山県大谷古墳では、土壌内に納められた組合式家形石棺の一方の小口板の外側の底石上の狭い空間に、のみ約18、鎌10余、鉈10余、鋤先8、手斧15、刀子約5の鉄製雛形品が、木製の柄や風呂を装着した状態で副葬されていた<sup>(64)</sup>。また後期中頃と想定される奈良県石光山4号墳、同20号墳などでも土壌内に直葬された木棺の棺端部から手斧、鎌、鋤先などの鉄製農工具ないしその雛形品が検出されている<sup>(65)</sup>。これらは農具の鉄器化の進展にともなって、セットの中で鋤先などが顕著にみられるようになっている点をのぞくと、その組合せや基本的な副葬位置まで前期以来のあり方を踏襲していることが知られるのである。

このような前期から後期にまで至る根強い農工具副葬の継続性や、その石製模造品化・鉄製雛形品化などの動きを考えると、それを祭祀の場をつくる建築用具とするきわめて魅力的な小林説の存在にもかかわらず、それのみでは説明が困難なように思われるのである。農工具が鏡や武器とともに、あるいはそれら以上に古墳の副葬品として重要な位置を占めてきたのは、やはりそれが農耕儀礼を司祭する者としての古墳被葬者の性格を反映するものであり、それはあくまでも農具及び農具製作用具として農耕儀礼の実修に必要な祭器であったためと考えるべきではなかろうか。

こうした理解にたてば、石製模造品の製作が、まず古墳の副葬品である農工具から始まったことも説明が可能になる。それは古墳の被葬者である首長にとって、そうした農工具を使用する農耕儀礼の実修がきわめて重要な職能であったからにほかならない。農工具の石製模造品化はそうした農耕儀礼の司祭者としての権能が死後においても発揮されることを願ってなされたものであろう。初期の農工具の石製模造品がまず古墳に見出されるのはこのためである。やがて第2期になると、鏡や剣や勾玉などの祭器とともに、機織具や酒造具の石製模造品が出現するのも、機織りや酒造りが神を祭る者の神聖な業であり、神衣を織り、神酒を調進することが、神饌の調進とともに神をまつるための要件であったからである<sup>(66)</sup>。つまり、農工具も、機織具も、さらに酒造具も神を祭る者の用いる祭器にほかならないのである。

## 5 神まつりと古墳の祭祀

このように、滑石製模造品は、まず古墳の被葬者である首長にとって最も重要な仕事である農耕儀礼の執行に必要な祭器の石製品化からその製作が始まったものであったと考えられる。その後、それ以外のさまざまな祭器も石製模造品化され、それは単に古墳に副葬されるのみならず、通常の祭祀の場においても用いられるようになる。この場合、古墳においては農工具の模造品がそれ以外の剣、鏡（有孔円板）、勾玉などに比較して特に重要視されたのはその出現の経緯からしても当然であったといえよう。ただよくいわれるように、剣や有孔円板が「古墳から出土することはごく少ない」ということは、第3期から第4期の諸例から考えると必ずしも当をえているとはいえない。むしろこの段階になると滑石製農工具の副葬とは別に、あるいはそれにかわって、一般の神まつりに用いられるようになっていた剣、有孔円板、勾玉などの模造品が古墳における祭祀にも用いられることが少なくなかったと考えられるのである。したがって、この段階になってはじめて神まつりと葬送儀礼が分離したと考えることはできない。また前節でみたように古墳の副葬品の中に神をまつる者のものも祭器が含まれていたと考えると、前期古墳の被葬者は司祭ではあっても、これを神と考えるのはいささか困難となる。一般に副葬品とよばれる古墳の出土遺物には、さまざまな性格の遺物が含まれている。そのなかには単に被葬者が身につけていた玉類や刀剣などの装身具、死者を悪霊などから守るために棺のまわりに並べられた鏡や棺上におかれた盾やある種の武器などの呪具、葬送儀礼の過程で用いられた土器などの遺物、さらに被葬者が生前用いていたその職能にかかわると想定される祭器や武器・武具などがある。これらの品物のうち鏡や玉類や武器・武具などは宝器として神に供献されることも少なくなかったと思われるが、そのことからただちに古墳の被葬者を神ないし神に近い存在と考えるのは危険であろう。古墳の被葬者はのちに石製模造品化する農工具などの神まつりの祭器の副葬の事実が如実に物語るように、何よりもまず神をまつる司祭者であったと思われるのであり、それは神自体とは本来区別されていたものと思われるのである。さらにそれらの祭器のなかでも、鏡や玉や剣などよりも先に、まず農工具が石製品化されることは、彼等古墳の被葬者である司祭者にとって、農耕祭祀が最も重要な職能であったことを物語っている。

『三国志』の魏書夫餘伝によると、古い夫餘の<sup>ならわし</sup>俗では、天候が不順で五穀の生育が順調でない時には、その責任を王のせいにし、或いは王を易えるべきだと言い、或い

は王を殺すべきだとしたという。このような王権の共同体的な、また王の司祭者的な性格は、弥生時代の終り頃から古墳時代にかけてのわが国の共同体の首長や古墳の被葬者たちにも共通のものであったと考えられ、農耕祭祀の司祭が、彼等にとって最も重要な役割であったことは想像にかたくない。農工具の副葬やその模造品化は、こうした背景を考えてはじめて理解できるのではなかろうか。一方、この段階の神まつりの対象である神の性格については、考古学的にアプローチすることはきわめて困難であるが、ただそれが穀霊にしろ、太陽などの自然神にしろ、人格神以前のものであったことは確実であろう。やはりこの段階では司祭者である首長が即神と考えられたとは思えないのである。

『万葉集』には

……大伴の 遠つ神祖の その名をば 大来<sup>おほき</sup>自主<sup>ぬし</sup>と 負ひ持ちて 仕へし官 海  
行かば 水浸く屍 山行かば 草生<sup>くさ</sup>す屍 大君の 辺にこそ死なめ 顧みは せ  
じと<sup>こと</sup>言<sup>た</sup>て 大夫の 清きその名を…… (巻18, 4094)

という大伴家持の有名な歌がみえ、その反歌の一つに

大伴の 遠つ神祖の 奥津城は しろく<sup>しほ</sup>標立<sup>め</sup>て 人の知るべく (巻18, 4096)

があることはよく知られている。ところでここで興味深いのは、記紀によると大伴氏の祖神は天孫降臨に従ったアメノオシヒノミコトということになっており、奈良時代の大伴氏はこの歌にいうオオクメヌシとアメノオシヒの2つの祖先を持っていたことになる<sup>(67)</sup>。もちろん記紀の神統譜につながるアメノオシヒノミコトなる祖神もそれほど遡るものとは考えられないが、それとは全く別にオオクメヌシと呼ばれる祖先があり、しかも『万葉集』の反歌からすると、その墓と考えられるものが実際に存在したらしいことが注意されるのである。この大伴氏の祖オオクメヌシの墓はおそらく古墳と考えるとさしつかえなかろう。したがって大伴氏には現実に存在するその祖先の古墳の被葬者であり、また一族の同族的結合の起点ともなるべき祖先としてのオオクメヌシがあり、それとは別の祖先神、というよりはむしろ氏の神としてのアメノオシヒが存在したことになる。これは単に大伴氏にのみ見られることではなく、おそらくすべての氏についても同様で、現実に古墳をのこしている祖先と、氏として斎き祭る氏の神は本来別個のものであったと思われる。埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘にみられるヲワケの臣の上祖オオヒコも神ではないのである。

このように、奈良時代の豪族たちにとっても、巨大な古墳をのこし、一族の同族的結合の中心となっているその偉大な祖先は、決して神とは考えられていなかったのである。このことは、本来的に古墳の被葬者が神と考えられることはなかったことを示

## 5 神まつりと古墳の祭祀

唆するものと理解してさしつかえなからう。それは同時代のひとびとにとっては神をまつる偉大な司祭であり、またその子孫にとってはその一族に繁栄をもたらし、その名を絶やすことなく伝えなければならない祖先であっても、決して神ではなかったようである。

大王の直轄領である屯倉から毎年新穀を献じたのが荷前使のはじまりであろうとされるが<sup>(68)</sup>、平安時代になっても、伊勢神宮と歴代陵墓へは荷前使が遣わされていたことは注目されよう。この歴代陵墓への荷前使の派遣が本来的なものであったとすれば、それは死後も農耕祭祀の司祭としての職能をはたし、豊かな稔りをもたらした大王の祖先への感謝の意味が含まれていたものであろう。これもまた司祭者としての古墳の被葬者の性格を示唆する興味深い材料といえよう。前期古墳を含めて、古墳の被葬者は決して神と考えられることはなかったと思われる。それはあくまでも農耕祭祀を中心とするさまざまな祭祀の司祭者にほかならないのであり、古墳における祭祀は彼が死後においてもよくその司祭としての役割りをはたし、永く共同体やその首長一族に豊かな稔りをもたらすことを願うものであったのではなからうか。古墳にみられる農耕祭祀の祭器としての農工具の石製模造品化やその副葬は、このことをわれわれに教えてくれるのである。こうした神まつりの司祭者であった首長に対する葬送祭祀と、神に対するまつりは、古墳時代の初めから本来全く別個のものであったろうとするのがこの小論の結論である。

### 註

- (1) 小田富士雄「沖ノ島祭祀遺跡の時代とその祭祀形態」(第三次沖ノ島学術調査隊編『宗像沖ノ島』263頁、宗像大社復興期成会、1979年)。
- (2) 井上光貞「古代沖ノ島の祭祀」43～48頁(同『東大三十余年』私家版、1978年)。
- (3) 小出義治「祭祀」288～290頁(『日本の考古学』V、古墳時代 下、河出書房、1966年)。
- (4) 榎山林継「祭と葬の分化—石製模造遺物を中心として—」(『国学院大学日本文化研究所紀要』第29輯、1972年)。
- (5) 白石太一郎「ことどわたし考——横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって——」(『橿原考古学研究所論集』第3 所収、吉川弘文館、1975年)、同「日本神話と古墳文化」(『講座日本の神話』12 所収、有精堂、1978年)。
- (6) 岡田精司「古代王権と太陽神——天照大神の成立——」(同『古代王権の祭祀と神話』所収、塙書房、1970年)。
- (7) 伊波普猷『をなり神の島』(岩波書店、1938年)。
- (8) 小林行雄「古墳時代における文化の伝播」(『史林』第33巻第3号・4号、1950年)。
- (9) 小野山節「千葉市石神2号墳の年代論の意義」(千葉県文化財センター『千葉市東寺山石神遺跡』所収、1977年)。
- (10) 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」(『日本考古学協会第8回総会研究発表要旨』、1951年)。
- (11) 八賀晋『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』(京都国立博物館、1982年)。

- (12) 久野邦雄・泉森皎『富雄丸山古墳発掘調査報告』(『奈良県文化財調査報告書』第19集, 1973年)。
- (13) 大場磐雄・佐野大和『常陸鏡塚』(『国学院大学考古学研究報告』第1冊, 1956年)。
- (14) 梅原末治『佐味田及新山古墳研究』(岩波書店, 1921年)。
- (15) このほか埼玉県本庄市立歴史民俗資料館所蔵の諸井興治氏寄贈資料のなかに、佐味田宝塚古墳出土と伝えられる石製模造品(刀子・斧・鏡・管玉・勾玉)があることを穴沢咏光氏の教示により知った。ただそれらのうち勾玉以外はいずれも中期に下る遺物と思われ、佐味田宝塚古墳のものとするのは困難である。
- (16) 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』(倉敷考古館, 1959年)。
- (17) 上田三平『奈良県に於ける指定史跡』第1冊(『史跡調査報告』第3, 内務省, 1927年)。
- (18) 秋山日出雄・網干善教『室大墓』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊, 1959年)。
- (19) 外山和夫「石製模造品を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐる」(『考古学雑誌』第62巻第2号, 1976年)。
- (20) 沼沢豊ほか『千葉市東寺山石神遺跡』(千葉県文化財センター, 1977年)。
- (21) 武田宗久「古墳時代」(『千葉市史』原始古代中世編, 1974年)。
- (22) 沼沢豊ほか『千葉市東寺山石神遺跡』(前掲)。
- (23) 世田谷区史編さん室『世田谷区史料』第8集 考古編(1975年)。
- (24) 『東京国立博物館図版図録』古墳遺物編 関東Ⅱ(東京国立博物館, 1983年)。
- (25) 森浩一・宮川徠『堺市百舌鳥赤畑町カトノボ山古墳の研究』(『古代学叢刊』第1冊, 1953年)。
- (26) 梅原末治『久津川古墳研究』(1920年)。
- (27) 後藤守一・相川竜雄『多野郡平井村白石稻荷山古墳』(『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告』第3輯, 1936年)。
- (28) 後藤守一『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』(『帝室博物館学報』第6冊, 1933年)。
- (29) 後藤守一「上野国碓氷郡八幡村大字剣崎字長瀬西古墳」(『古墳発掘品調査報告』帝室博物館学報 第9冊, 1937年)。
- (30) 柿沼修平ほか『多古台遺跡群調査概報』(『日本文化財研究所文化財調査報告書』2, 1976年)。
- (31) 森田秀策『安中市誌』歴史編 古代(1964年)。原田道雄「関東地方の初期横穴式石室古墳」(『駿台史学』第30号, 1972年)。
- (32) 後藤守一・大塚初重『常陸丸山古墳群』(1957年)。
- (33) 島津義昭ほか『福岡市和白遺跡群』(『福岡市文化財調査報告書』第18集, 1971年)。
- (34) 竹並遺跡調査委員会編『竹並遺跡』(1979年)。
- (35) 高橋健自『古墳発見石製模造器具の研究』(『帝室博物館学報』第1冊, 1919年)。『東京国立博物館図版目録』古墳遺物編 関東Ⅱ(前掲)。
- (36) 宗像神社復興期成会編『沖ノ島』(吉川弘文館, 1958年), 同『統沖ノ島』(吉川弘文館, 1961年), 第3次沖ノ島学術調査隊編『宗像沖ノ島』(宗像大社復興期成会, 1979年)。
- (37) 亀井正道『建鉢山——福島県表郷村古代祭祀遺跡の研究——』(吉川弘文館, 1966年)。
- (38) 田島桂男『日本の古代遺跡』17, 群馬西部 76頁(保育社, 1984年)。なお調査を担当された富岡市教育委員会の井上太氏の御好意により遺物を実見するとともに、遺跡の状態について教示をえた。
- (39) 梶山林継「石製模造品」36~37頁(大場磐雄編『神道考古学講座』第3巻, 原始神道期2, 雄山閣, 1981年)。
- (40) 布留遺跡範囲確認調査委員会編『布留遺跡範囲確認調査報告書』(天理市教育委員会, 1979年)。
- (41) 高橋一夫「石製模造品出土の住居址とその性格」(『考古学研究』第18巻3号, 1971年)。

梶山林継「住居址発見祭祀遺物の研究——時期検討を中心に——」(『国学院大学日本文化研究所紀要』第35輯, 1975年)。

- (42) 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」(前掲)。
- (43) 大場磐雄・佐野大和『常陸鏡塚』30~31頁(前掲)。
- (44) 沼沢豊ほか『千葉市東寺山石神遺跡』45頁(前掲)。
- (45) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁霞子『総社市隋庵古墳』(総社市教育委員会, 1965年)。
- (46) 梅原末治『久津川古墳研究』(前掲)。
- (47) 森浩一・宮川徭『堺市百舌鳥赤畑町カトンボ山古墳の研究』(前掲)。
- (48) 梅原末治「河内国小山城山古墳調査報告」(『人類学雑誌』第35巻第8~10号, 1920年)。
- (49) 秋山日出雄・網干善教『室大墓』(前掲)。
- (50) 堀田啓一「総括」226頁(伊藤勇輔編『北葛城郡当麻町兵家古墳群』, 『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第37冊, 1978年)。
- (51) 宮崎勇造「筑後国浮羽郡千年村徳丸塚堂古墳」(『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告』第10輯, 1935年)。
- (52) 島津義昭ほか『福岡市和白遺跡群』(前掲)。
- (53) 九州大学文学部考古学研究室編『老司古墳調査概報』(福岡市教育委員会, 1969年)。
- (54) 小田富士雄「九州」(『神道考古学講座』第2巻 原始神道期1, 1972年)。
- (55) 秋山日出雄・網干善教『室大墓』(前掲)。
- (56) 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』(前掲)。
- (57) 森浩一「古墳文化と古代国家の誕生」(『大阪府史』第1巻 668~669頁, 1978年)。
- (58) 樋口隆康・岡崎敬・宮川徭「和泉国七観古墳調査報告」(『古代学研究』27, 1961年)。
- (59) 伊東信雄「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」(『歴史』6, 1953年)。
- (60) 梶山林継「祭と葬の分化——石製模造遺物を中心として——」(前掲)。
- (61) 小林行雄「古墳時代の文化」39頁(『古墳時代の研究』青木書店, 1961年)。
- (62) 小林行雄「古墳の話」154頁(岩波書店, 1959年)。
- (63) なお寺沢知子氏は、この小林説を「葬屋・木棺などの製作」に必要な建築用具説と解しておられるが、これは明らかに誤解である。寺沢知子「鉄製農具副葬の意義」358頁(『橿原考古学研究所論集』第4, 吉川弘文館, 1979年)。
- (64) 樋口隆康・西谷真治・小野山節『大谷古墳』(和歌山市教育委員会, 1959年)。
- (65) 白石太一郎・河上邦彦・亀田博・千賀久・関川尚功『葛城・石光山古墳群』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊, 1976年)。
- (66) 柳田国男「瓜子織姫」(『桃太郎の誕生』三省堂, 1935年, 『定本柳田国男集』第8巻, 筑摩書房, 1969年)。
- (67) この点については吉田孝氏との談話から貴重な示唆をうけた。同氏の御教示に感謝申し上げます。吉田孝「祖名について」(土田直鎮先生選暦記念会編『奈良平安時代史論集』上巻, 吉川弘文館, 1984年)。
- (68) 岡田精司「天皇家始祖神話の研究」259頁(『古代王権の祭祀と神話』塙書房, 1970年)。
- (69) 松岡史『唐津市史』古代(1962年)。
- (70) 飯塚市教育委員会『栗崎山古墳群』(1973年)。
- (71) 福岡県教育委員会『セストノ古墳調査概要』(1969年)。
- (72) 佐々木隆彦『奴山5号墳』(津屋崎町教育委員会, 1978年)。
- (73) 松岡史『佐谷・脇田山古墳調査報告』(福岡県教育委員会, 1974年)。
- (74) 森光晴・長井数秋ほか『三島神社古墳』(松山市教育委員会, 1972年)。
- (75) 「岩崎山古墳」(『香川県史跡名勝天然記念物調査報告』第5冊, 1930年)。
- (76) 山口県教育委員会『朝田墳墓群』Ⅲ(『山口県埋蔵文化財調査報告』第37集, 1978年)。
- (77) 村上正名「広島県神辺町国成古墳の調査」(『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』1965年)。

- (78) 後藤守一『漢式鏡』(雄山閣, 1926年)。  
 (79) 高倉浩一『石鏡山古墳群』(広島県教育委員会, 1981年)。  
 (80) 山本清「小規模古墳について」(同『山陰古墳文化の研究』1971年)。  
 (81) 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」(同『山陰古墳文化の研究』1971年)。  
 (82) 山本清「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」(同『山陰古墳文化の研究』1971年)。  
 (83) 『倉吉市史』(倉吉市, 1973年)。  
 (84) 高野政昭『壺根古墳群』(相生市史編纂室, 1983年)。  
 (85) 山本三郎・渡辺昇ほか『半坂峠古墳群・辻遺跡』(『兵庫県文化財調査報告書』第18冊, 1983年)。  
 (86) 北野耕平『河内野中古墳の研究』(『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第2冊, 1976年)。  
 (87) 末永雅雄・嶋田暁・森浩一『和泉黄金塚古墳』(日本考古学協会, 1954年)。  
 (88) 末永雅雄「奈良市法華寺町宇和奈辺古墳群大和第三, 第四, 第五, 第六号古墳調査」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第4輯, 1949年)。  
 (89) 奈良県立橿原考古学研究所編『新沢千塚古墳群』(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第39冊, 1980年)。  
 (90) 今尾文昭・長谷川俊幸「高取町市尾今田古墳群発掘調査概報」(『奈良県史蹟調査概報』1981年度 第2分冊, 1983年)。  
 (91) 森浩一「奈良県乙女山古墳の遺物」(『古代学研究』55号, 1969年)。  
 (92) 伊藤勇輔編『北葛城郡当麻町兵家古墳群』(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第37冊, 1978年)。  
 (93) 下村三四吉「山城国大原野村鏡山古墳の発見品」(『考古学会雑誌』第1巻第4号, 1897年)。  
 (94) 『岐阜県史』通史編 原始(1972年)。  
 (95) 栗田則久ほか『千葉東南部ニュータウン』13(千葉県文化財センター, 1982年)。  
 (96) 大場磐雄・亀井正道「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」(『考古学雑誌』第37巻第3号, 1951年)。  
 (97) 大場磐雄・乙益重隆編『上総菅生遺跡』(中央公論美術出版, 1980年)。  
 (98) 君津市教育委員会『馬門古墳発掘調査報告』(1974年)。  
 (99) 浜名徳永・相山林継ほか『下総小川台古墳群』(芝山はにわ博物館, 1975年)。  
 (100) 大場磐雄ほか『松戸河原塚古墳』(松戸市教育委員会, 1959年)。  
 (101) 柳田敏司「本庄市公卿塚と石製模造品」(『埼玉考古』復刊1号, 1963年)。  
 (102) 『新編埼玉県史』資料編2(1982年)。  
 (103) 『群馬県史』資料編3(1981年)。  
 (104) 尾崎喜左雄「群馬県佐波郡藤手塚古墳」(『日本考古学年報』5, 1957年)。  
 (105) 尾崎喜左雄「群馬県太田市鶴山古墳」(『日本考古学年報』1, 1951年)。  
 (106) 『栃木県史』巻12 考古編(1937年)。  
 (107) 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物編 関東I(東京国立博物館 1980年)。  
 (108) 清野謙次『日本考古学・人類学史』下巻 808~815頁(岩波書店, 1955年)。  
 (109) 『福島県史』第1巻 原史・古代・中世(1969年)。  
 (110) 福島県教育委員会『福島県発見の埋蔵文化財図録』(1952年)。  
 (111) 新国西賞「岩代国安積郡の古墳」(『東京人類学会雑誌』第7巻第76号, 1892年)。  
 (112) 伊東信雄「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」(『歴史』第6輯, 東北史学会, 1953年)。  
 (113) 斎藤忠「石製模造品の一資料」(『考古学雑誌』第23巻第5号, 1933年)。  
 (114) 藤田亮策「真野古墳群調査概報」(『史学』第23巻第3号, 1948年)。  
 (115) 石田茂輔「日葉酢媛命御陵の資料について」(『書陵部紀要』第19号, 1967年)。

- (116) 鈴木博司・西田弘ほか『新開古墳』（『滋賀県史跡調査報告』第12冊，1961年）。
- (117) 掛川市教育委員会『水垂二ツ池古墳群』（1974年）。
- (118) 前澤輝政『毛野国の研究』下（現代思潮社，1982年）。
- (119) 森田秀策『安中市誌』歴史篇 古代（1964年）。

（本館 考古研究部）